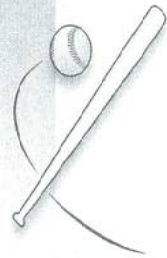


成長と復活 投手二枚看板

悲願へ 箕島球友会



社会人野球
日本選手権

ゆったりとしたモーションから繰り出される球は、伸びやかに捕手のミットに吸い込まれていく。メットライフドーム（埼玉県所沢市）で9月4日にあった第42回全日本クラブ野球選手権大会決勝で、和歌山箕島球友会の左腕・和田拓也投手（23）は、強豪・大和高田クラブ（奈良）相手に、連打さえ許さぬ好投を続けていた。

2年前のこの大会で優勝した後、故障者が相次ぎ低迷していた球友会。

戦いの軌跡①

和田投手も1年目の昨年、左肩痛でほとんど登板できなかった。しかし、けがを治して臨んだ今大会の西近畿地区予選1回戦、昨年2度にわたり苦杯をなめさせられた県警桃太郎（兵庫）相手に完投し、雪辱に貢献した。

「昨年1年間何も貢献できなかったが、この1勝で少し自信がついた」と振り返る。

所沢に入っても調子を上げ、2回戦の鹿児島ドリームウェーブ（鹿児島）戦で先発して完封勝利を



全日本クラブ野球選手権大会で優勝し、西川忠宏監督（中央）を胴上げて喜ぶ和歌山箕島球友会の選手たち

＝メットライフドームで9月4日

飾る。予選後の練習試合で打たれ、「このままでクラブ選手権で勝てない」と、体の開きを抑えるなどフォームを改善した成果が出ていた。

15年のクラブ選手権優勝時の立役者ながら、16年は故障に苦しんだ寺岡大輝投手（24）も今大会、エースの誇りを取り戻した。準決勝のゴールドジ

ム（東京）戦は、西川忠宏監督（56）が「一番大事だった」と振り返る試合だ。前の試合を偵察して「勢いがある」と警戒を強めた首脳陣から、決勝での先発予定を変えて急きょ起用された寺岡投手は、五回まで無安打無死

四球と完璧な投球を見せる。2-0で迎えた九回裏、2死二塁から適時二塁打で1点を失ったものの、次打者を右飛に抑えて踏ん張った。「本当は決勝で投げたかった」と言いつつ、12三振を奪って「今年一番の投球」と納得の表情を浮かべた。

準決勝で寺岡投手を起用できたのは、和田投手がエースに並ぶ二枚看板に成長したからだ。決勝で和田投手は期待に応え、ツーシームとフォークボールを効果的に使い、九回まで被安打2と三塁さえ踏ませなかった。タイブレーク制の延長十回こそ2点を奪われたものの、その裏に水田信一郎捕手（29）のサヨナラ適時打で優勝を果たした。

故障者が復調して2年ぶりに立った頂点。ただ、日本選手権初勝利を悲願とするチームにとっては通過点でしかない。京セラドーム大阪で明治安田生命（東京）と戦う11月2日、林尚希主将（27）は「球友会の歴史に新たな1ページを刻む」つもりだ。

◇第42回全日本クラブ
野球選手権大会
大阪・和歌山1次予選
＝2017年6月

【1回戦】
○11-2 関西硬式ク
（七回コールド）
【準決勝】
○12-1 大阪HDク
（七回コールド）

【決勝】
○3-0 NSBK
西近畿予選＝17年7月
【1回戦】
○5-2 県警桃太郎
【代表決定戦】
○19-11 NSBK
（八回コールド）

本大会＝17年9月
【1回戦】
○20-3 東北マークス
（七回コールド）

【2回戦】
○5-0 鹿児島ドリームウ
ェーブ
【準決勝】
○2-1 ゴールドジムク
【決勝】
○3-2 大和高田ク
（延長十回＝タイブレーク）

【木原真希】